

小林 登 (Kobayashi Noboru) チャイルド・リサーチ・ネット所長

医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長。ベネッセ次世代育成研究所所長。子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）センター長。日本子ども学会代表。日本赤ちゃん学会名誉理事長（前理事長）。日本母乳保育学会名誉理事長（前理事長）。日本子ども虐待防止学会名誉会長（前会長）。

1927年東京生まれ。54年東京大学医学部医学科卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞（1984年11月）、毎日出版文化賞（1985年10月）、国際小児科学会賞（1986年7月）、勲二等瑞宝章（2001年秋）、武見記念賞（2003年12月）などを受賞。

主な著作は小児医学専門書以外には、「ヒューマンサイエンス」（中山書店）、「子どもは未来である」（メディアサイエンス社）、「育つ育てるふれあいの子育て」（風濤社）、「風韻怎思—子どものいのちを見つめて」（小学館）その他多数。

Child-Caring Design (CCD)

Child-Caring Design (CCD) とは、子ども達の事を考え、配慮して、子どもの立場から、子どもに関係する全てのモノ（ハード）やコト（ソフト）をデザインする・設計するという事である。英語で“child care”というと、「保育」、特にアメリカでは、有料の保育士による保育園での限られた時間の教育を含めた子どもの世話を指す。しかし CCD は、保育デザインも含むがそれだけを意味している訳ではない。

CCD は演者の考えた言葉であるが、その発想は古い。子どもにとってどんな都市が良いかという発想で、1970年代末にはギリシャで国際会議が開かれ、1980年代に入って演者が東京で国際小児科学会 (IPA) のシンポジウムを開催した。そのオピニオンリーダーは、アメリカ、シアトルの小児科医 Aldrich 教授であった。彼は 1970年代、シアトル市を“Kid’s City”と呼び、子ども達の意見を取り入れて市を良くしようとしたのである。

1971年、文部省（当時）の指示により世界の医学教育の在り方を1ヶ月程かけて視察する機会があった。その時、現代社会の人間の問題を解決するには専門分化した学術体系では不十分であり、学際的、環学的、あるいは包括的、統合的な学問が必要として、医学教育の柱に「人間科学」“Human Science”という新しいパラダイムの科学が取り上げられていた。子ども問題も同じと考え、“Child Science”（「子ども学」、児童科学）を提唱し、体系付けたいと思った。CCD は、その大きな柱のひとつである。何故なら、いつでも、どこでも、子どもは危機にあるからである。英語では“Children at Risk”と言われている。発展途上国では貧困が大きな問題で、栄養失調・感染症で子ども達は生命の危機にあり、先進国でも交通事故などによる死亡、生活習慣による肥満、それに続く糖尿病・心疾患、教育負担による不登校・いじめ、更に「子ども虐待」の多発の現実がある。そうした状況からも、それは明らかである。

CCD は、危機にある子ども達を救う為に、子どもの生活の在り方ばかりでなく、生活の中にある教材、玩具、学校、教育制度、そして都市までを子どもにとってより良くするのに必要な考え方である。また、それらをデザインする場合、“Child Science”による知見が重要であり、脳科学を柱にする必要があると考えている。